

相生町の伝説

史学班（徳島史学会） 湯 浅 安 夫¹⁾

1. 相生町の伝説の背景

相生町は那賀山分の中心地で、那賀川をさかのぼれば^仁宇谷奥へ、紅葉谷川をさかのぼれば勝浦郡へ、赤谷川をさかのぼれば日和佐町へ通ずる、昔から東西南北の交通の要地であった。延野地区には^{うまつぎ}駅という所があり、昔からの交通の要地をよく表しているようだ。

町の北側は剣山山脈が東に延びた勝浦郡との境をなす山なみがあり、南側には剣山山脈から分岐した海部山脈が連なり、その二つの山なみの中央を那賀川が貫流している。その那賀川へ紅葉川、谷内川、赤松川、蔭谷川などが流入している。したがって、相生町の地形は北部山地、中央低地、南部山地と大きく三つに分けることができる。集落は中央低地を中心に立地し、中央低地部は那賀川左右両岸の河岸段丘及び旧河道の河跡平地からなる。気候は温暖多雨で、山林や作物のよく育つ恵まれた気候である。

次に相生町の歴史であるが、隣町の上那賀町^{ふるや}古屋に縄文時代の岩陰遺跡があるが、相生町には、縄文・弥生の遺跡は発見されていないし、古墳時代の遺跡もない。中世になって、板碑や五輪塔が多く散在するし、延野城が築かれたようである。そのような文化は、早くから人が住み着いて文化を発達させた基盤があつてこそ考えられるものである。したがって相生町の歴史は相当古いことが想像される。

また、仁宇谷には各村に多くの農村舞台が建立され残されているが、相生町にも^{へかわ}辺川の辺川神社や谷内の八幡神社などに9棟が残されていた（現在は7棟）。そこで上演された人形浄瑠璃などには、近在の人々も大勢が詰めかけたそうで、人々の交流は伝説の伝播という文化の交流につながったようである。

2. 相生町の伝説の分類と一覧表

その地域の伝説は、その地域の自然や人々の生活の歴史を基盤として生まれてくることはいままでもない、相生町の伝説の基盤あるいは背景をなす自然と生活の歴史の概略は前述したとおりである。そのような背景を反映して相生町には多くの伝説がある。すでに『相生町誌』(A)や、高齢者役割対策推進会議の方々による『相生町の昔のはなし』(B)、老人クラブ連合会の方々編集した『昔のくらし相生町』(C)という本に、そうした伝説の一部が収集されている。それらに収められているものや、古老の方々からの聞き取り調査から判明した相生町の伝説を次のように分類し一覧表にしてみた。

1) 徳島市住吉1丁目9番29号

表1 相生町の伝説一覧表

人物に関するもの (13)	樫飯又衛門とそば膳(A)・宮大工の彦左衛門(A)・名工覚左衛門(B)・仁宇谷一揆と勝郎太(A)・久六さん(中村竹雄さん談)・炭焼きの長六さん(B)・緑茶貿易事始の山内庄吉(A)・梶浦さん(B)・遍明信士の墓(B)・大前の六兵衛さん(B)・益太の鉄砲(B)・山賊野首三左衛門(B)・女白波(A)
動物に関するもの (15)	熊神さん(A)・人を食った狒猿(A)・湯屋の大蛇(A)・千匹猿(A)・大宮の大蛇(A)・かみつく小鰻(『阿波伝説集』)・通信人の危難(B)・犬の墓(B)・野根子神社の大猿(B)・大山谷の蛇(B)・内山口のじゃおんさん(B)・轟の滝と大蛇(B)・蛇測のじゃ(B)・柏木神社と猫(B)・入野の山犬(C)
木や石に関するもの (15)	朴野の七本杉と胡瓜断ち(A)・潮の満ち干がわかる手洗い鉢(A)・梶浦の大檜(A)・清水の大椋(A)・のぞき石(A)・のぞき石の大岩(A)・もやい藤(A)・弥次郎石(A)・龍山の踊り石(B)・泣き石(B)・蛇の枕石(B)・蛇石さん(B)・大樟さん(B)・天狗松(B)・力石(C)
社寺・神仏に関するもの (32)	花折り地藏(A)・地藏尊の夢告げ(A)・里帰りした権現さん(A)・請谷の氏神さん(A)・忘れものの神(A)・八面さん(『阿波の語りべ』)・松尾神社と寒造り(『阿波の語りべ』)・請谷の観音さん(B)・白人神社(B)・人丸さん(B)・中洲の権現さん(B)・経塚(中村竹雄さん談)・経塚の仏さん(B)・柏木神社の由来(B)・お寺と泥棒(B)・目の神様(B)・清月庵の不思議(B)・お鶴さん(谷崎啓一さん談)・稚児ノ宮の宝刀(A)・密圓さん(B)・流された不動さん(B)・陰のお姫さん(B)・お初大明神(B)・夜泣きの地藏さん(B)・おろおっさん(B)・千体地藏(B)・裸の竜神さん(B)・蛇王権現の由来(B)・鉢の薬師さん(A)・慶光庵の地藏さん(A)・辺川神社と農村舞台(B)・馬路の愛染さん(B)
地名に関するもの (23)	コヅカ谷(A)・踊り台(A)・暮れ谷(A)・罐子谷(A)・長者が平間(A)・舞ヶ原(A)・大建小建(A)・衣装田(A)・鉢(A)・駅(大西隆さん談)・雄(A)・蟹が峠(B)・袖が森(B)・加賀利屋(B)・弥ハガへ(西田実さん談)・評議田(B)・大久保(A)・朝生(A)・やつうち(A)・吉野(A)・竹ヶ谷(A)・鎌瀬(A)・おうどう坂(A)・花瀬(A)
水に関するもの (12)	あまどまりの滝(A)・蛇池と弁天岩(A)・塩売り測(A)・雨乞い(A)・皿洗いの滝(B)・弁天の滝(B)・高橋の測(B)・とどはん(B)・坊主池(A)・湯屋の滝(A)・伝兵衛滝(A)・蛇が測(A)
旧家に関するもの (7)	山父退治の露口家(露口敬さん談)・明和の疫病と山脇家(A)・楠の休場を拓いた子孫(A)・軍用の大杓子(A)・おしこの宝(A)・延野豊後守の子孫(A)・相名の開祖上村家(A)
妖怪・変化に関するもの (16)	山父(上那賀の伝説)・夏の夜の雪(『阿波伝説集』)・巨人の足跡(A)・あかまいだり(『阿波伝説集』)・三本松のおろくさん(A)・王子の谷の白狸(中村竹雄さん談)・久望の狸(B)・狸に化かされた坊さん(大西隆さん談)・相名坂の狸(B)・牛測のごたろう(A)・なすびの逆たち(B)・左一っあん(B)・平八狸(B)・赤どろの狸(B)・かみぢの楠と古狸(B)
その他 (19)	梅の守(A)・幟窯(A)・おふなとはん(A)・くせ山(A)・七人塚(宮口一男さん談)・平家落人の墓(A)・西方寺跡の五輪塔(A)・木地屋の墓(A)・雪の積まない摺鉢(A)・正月に餅つかず(B)・胡瓜を作らなかつた部落(A)・延野城跡(B)・苔山の境争い(B)・牛で定めた村境(B)・汗ものと藁草履(B)・焼き山(B)・首なし馬(B)・京女の墓(B)・お医者道(B)

3. 相生町の伝説の特色

相生町の伝説の特色の第1に、相生町には多くの伝説があり、それらの研究はすすんでいて、多くの伝説が収集されているということをおげたい。前記の一覧表でも150をこえる。その伝説の内容をみると、山地に多い谷川にある滝や測に関するもの、大蛇、熊や山犬などの動物、木や石に関するものが多い。また、平家落人が逃れてきたという平家伝説

は相生町にも多い。

社寺・神仏に関するものが多いことは、信仰心の厚い現れであろうと思われる。しかし、県下殆どの町村には弘法大師の活躍した弘法伝説が寺院を中心にあちこちに多いが、相生町には意外に少ない。そのことを第2の特色としたい。

次に、前述のように相生町は交通の要地で、昔から人々の行き来の多い所であった故か、各地の伝説が伝わっているようである。例えば、鳴門市などに祀られている柿本人麿の人丸神社、穴吹町などで祀られている白人神社やそれにまつわる源為朝の伝説、上那賀町にある伝説などが伝わっている。各地の伝説の流入が多いということを、第3の特色としてあげたい。

次に伝説調査に協力していただき、現地まで案内していただいたうちの立派な遺跡のある二つの伝説を紹介したい。

4. 相生町の伝説の紹介

○久六さん〈人物〉

昔、^{だんしょ}段所に久六さんという^{こびき}木挽が住んでいた。久六さんは体が小さく力も弱く、木挽に似合わない体であったが、小さい頃から親方について方々の山で木挽の仕事をしていた。

心やさしく、生一本の真面目さは、仕事仲間や村人にもほめられ者であった。家は貧しかったが、親・兄弟思いで、目上の人のおいづけをよく守り、世話をよくして、朝は誰よりも早く、みんなが休んでいる時でも、鋸や刃物の手入れをよくして、休むことがなかった。「わしは体もこまいし力も弱いので、こうでもしないと、人さまに迷惑をかけることになるんで」と、口ぐせのようにいって、いやな顔も見せず働きつづけていた。

ある年のこと、土佐の国に大きな仕事があって、久六さんは兄弟子たちと土佐の奥山で仕事をしていた。その日は「^{じょうもく}常目の日」で山の神さんの祭日、出仕事はみんな休みの日で、ほかの者はみんな里に下り、久六さん一人が山に残って、鋸の手入れをしていた。突然強い風とともに、山の天狗さんが現れて、「これ久六、今日は常目の日じゃ。どうして仕事を休まぬ」と、きついお叱り、久六さんは、きちんと座り両手をついて、「山の神さんには、朝早くお参り致しました。ごらんの通り私は、こんなに小さい体、人様に迷惑…」天狗は久六さんの言葉をおさえて、「久六、びっくりさせて相すまん。お前のことは前々からよく知っている。今日はお前に^{ほうび}褒美をつかわす、これじゃ



写真1 久六さんの墓

受け取れ」と、朱色の墨壺^{すみつぼ}を差し出し「久六、これからも仕事に精出し、木挽の鑑となれよ」といって、天狗は消えた。夢ではないかと、わが身をつねってみる久六だが、朱色の墨壺を両手に捧げ持って、姿なき天狗にお礼を言った。

あくる日、先日から挽きあぐねていた粘り松の大木に墨を打って挽いてみると、力もいらずわけなく挽き割れて、その切り口は、誰の鋸にも劣らない見事な切り口であった。その後、久六さんの木挽ぶりは近郷に広がって、噂は將軍の耳にも達し、呼び出しがあった。「久六とやら、木挽の達人と聞くが、この手洗鉢を挽き割ってみよ」との仰せであった。それは六尺もある大きな石の手洗鉢だった。返事に窮した久六は平伏して、「今晚一晩のご猶予を…」と、朱色の墨壺を手洗鉢に打つてみたが、相手が石ではどうにもならない、打ち首覚悟で、墨壺を懐に役所へ逃げ帰って来てしまった。

翌朝、將軍は手洗鉢を見に庭に出てみると、そのままの手洗鉢、「たかが、阿波の木挽…」と、あざ笑いながら、手洗鉢に両手をふれると、こは如何に、石の手洗鉢は真二つに割れた。その切り口も磨いたような見事さ！

その後の久六さんは、誰からも神様のようにいわれ、85歳の長寿いっぱい働きたと伝えられている。この墨壺は家宝として大切に保存していたが、今は行方不明。墓は段所の道端の墓地にあり、今もまつられている。 (延野 中村竹雄さん談 83歳)

○お鶴さん〈社寺・神仏〉

屋島、檀の浦の合戦に敗れた平氏は、みんな散りぢりになって各地の山奥深く隠れ住まなくてはならなくなった。その頃、蔭谷^{かげだに}の部落は、那賀川からわかれて谷ふかく奥に入ったところの小さな盆地に、数軒の家が寄り合い、点在していた。そこを流れる蔭谷川^{しやくし}に、ある日、不思議なことに、一つの粗末な杓子が流れてきた。ここより上流は全くの原始林で、人など住んでいる筈はなかったのである。こんな奥山にも源氏の平氏探索のお触れがきていたようである。「もしかして平家の落人では…？」と、ささやき合った村人達は、お上のお触れもあり、寄合をして相談したあげく、5～6人の達者な男衆が武器を持って調べに行くことになった。

あくる日、男達は蔭谷川に沿うてさかのぼること数時間、小さな丘になった台地に、予想どおり母子二人を発見した。女性の齢は30歳前後であろうか、やつれてはいるが端麗な容姿と気品がある。男の子は髪は鳥の巣のようになっているが、その目鼻立ちから武士の子であることは一目でわか



写真2 お鶴大明神

った。傍らの杉の下蔭に小屋をむすび、かくれ身の貧しくて細い煙を立てていたようである。

村の男に発見された女性は、今日の日の来るのを予期して覚悟を決めていたものか、端然として男衆を見据えていった。「私は平家の血をひく者で、お鶴と申します。源氏方に追われ、ここまで落ちのびて隠れ、山中の草を採り、小魚や鳥を食して、再び平家の世がくることを信じて生き、耐えてまいりましたが、こうしてあなた達に見つかってしまった以上、助かるすべはございません。覚悟は出来ておりますが、私も平家一門の武士の家に生まれました。部将の妻らしく自害いたしとう存じますので、死装束に着替えさせて下さいませ。そしていま一つ、これにおります私の息子はまだ幼い子供でございます。この子に何の罪がございましょう。どうか、この子だけは助けてやって下さいませ。どうかよろしくお願いいたします。」と、泣かんばかりのお鶴の言葉。男衆はすっかり心をひかれ、「ようわかった、お前さんの命も助けてあげたいのはやまやまじゃが、いまの時世でどうすることもできへん。じゃが、可愛い稚児の命、たしかにお預かりしましょう。どうか心おきなく往生なされや。」「ありがとうございます。それでは装束に改めますゆえ、しばらくお待ちください」といって後ろ向きに一步ふみだした。

その時、何を思ったのか、男の一人が、山刀を抜き背後から斬りつけた。「ぎやっ」お鶴はその場に倒れ、息絶えた。お鶴に情をかけたということが世間に広まると、かえって悪い結果になって、はねかえってくると考えたのかもしれない。なんともあわれで無残なお鶴の最後であった。その亡きがらを埋葬した男衆は、約束通り、子供を連れて帰ることにした。山を下る途中、母親が斬り殺された悲しみも、はっきり意識しえない幼児と思っただこの子は、川が三つに分かれている三ツ合いにさしかかった時、道端のススキを一本抜き取って空へ投げあげて、腰の小刀がキラッと光った瞬間、降ってきたのは幾つかのススキの切れ端であった。「ほおっ」その技に舌を巻いた男衆は、「この子はただもんじゃないぞ、生かしておいたら、いっかきと、今日のことを知って…」以心伝心、男衆は心を鬼にして、その場近くで稚児の命を絶ったと伝えられる。

その後、村人はお鶴さんの崇りを恐れて手厚く葬り、蔭谷在所から3km奥の字蔭山かげやまに「お鶴大明神」として一祠を建て、通夜堂つやどう（間口4m・奥行き6m）を設け、毎年盆15日を供養の日とし、村人は仕事を休み境内に集まり供養をしてきた。現在、現地には、真新しい祠の前にそのいわれが書かれた案内の柱が立てられている。

一説には、お鶴さんは現上那賀町の古屋谷の豪族の嫁で、その時代の豪族同志の戦いに敗れ、蔭谷の山中に潜んでいたところを、敵の手により斬殺されたともいわれる。

なお、「お鶴の衣装塚」というのがある。場所は蔭谷在所を60mほど登ったところに「ぼうやしき」と呼ばれる岡本家の墓域がある。そこから数段上った山裾に一つの塚があ

る。荒々しい山石の四方積みの塚は苔むして、わかりにくくなっている。この塚は昔から「お鶴の衣装塚」といって、岡本家では代々丁重に祀っている。その塚は蔭谷川の上ツ瀬に散ったお鶴と稚児の死装束が埋められていると考えられる。

(朴野 谷崎啓一さん談 82歳)

紙面の都合でわずかの伝説しか紹介できないのを残念に思います。伝説の収集に際して、ご多忙のところ貴重な話をお聞かせいただいたり、わざわざ伝説の地をご案内いただいた中村竹雄さん、谷崎啓一さん、大西隆さん、露口敬さん、東浦武次さん、西田実さん、その他大勢の方々にお世話になりました。厚くお礼申し上げます。

参考文献

- 相生町誌編纂委員会（1973）：『相生町誌』相生町役場
相生町老人クラブ連合会（1985）：『昔のくらし相生町』相生町
相生町高齢者役割対策推進会議（1990）：『相生の昔のはなし』相生町
徳島県老人クラブ連合会編（1988）：『阿波の語りべ』徳島県老人クラブ連合会
横山春陽著（1980）：『阿波伝説集』歴史図書社
藤澤衛彦著（1919）：『日本伝説叢書阿波の巻』日本伝説叢書刊行会
日本放送協会編（1950）：『日本伝説名彙』日本放送出版協会
速水可次編（1990）：『阿波の農村舞台』阿波のまちなみ研究会
武田明・守川慎一郎著（1977）：『阿波の伝説』角川書店
福田 晃編（1982）：『日本伝説大系第十二巻』みずうみ書房